

親子2世代にわたるクリニックで “人と環境に優しい医療”を展開

2015年7月取材



福岡県大牟田市
医療法人飯田クリニック 院長
飯田 如 先生

2011年、飯田如先生は、40余年の歴史を持つ泌尿器科・透析クリニックを父親の收先生（現理事長・名誉院長）から継承しました。以降、腎臓内科を担当する弟の修司先生（副院長）と共に、高い専門性と幅広い対応力を兼ね備えたクリニックとして、新たな歴史を刻んでいます。

地域の透析医療の草分け的な存在

飯田先生の父親の收先生は、1969年に泌尿器科クリニックを開業し、2年後の1971年には大牟田地域初の透析センターを開設しました。飯田先生は、「透析医療がまだ学問の域を出ないような時代でしたから、勇気ある決断だったと思います」と話し、「そんな事情を知る由もない当時の私と弟は、父と技士さんが朝早くから、お風呂のようなタンクに透析液を入れる姿を眺めていました」と振り返ります。

飯田先生は、「父の背中を追って」同じ久留米大学医学部の泌尿器科に進みました。一方、弟の修司先生は、「今後の透析医療には内科的管理が不可欠」という收先生の考えもあり、同大学医学部で循環器内科、腎臓内科を専門とします。「先見の明がありましたね」と飯田先生が話す收先生は、医療の一線から退いた今も毎日透析室に足を運び、患者さんに声を掛けているそうです。



副院長の飯田修司先生。「一番長い方で41年間、当クリニックで透析をされています」と感慨深げに話す言葉から、透析医療の進歩の手応えと、患者さんの人生に寄り添うことへの責任感がうかがい知れます。

結石治療をきっかけに、内科疾患を予防する



前立腺切除術、尿路結石除去手術、膀胱悪性腫瘍手術など、手術件数は年間150例以上に及びます。写真の手術台は高さ調整などが行える最新式で、九州ではまだ1台しか導入されていません。

大学院で尿路結石の研究に携わり、大学病院で腹腔鏡を含む内視鏡下手術を数多く経験した飯田先生が、「一番重要だと思います」と話すのが手術後の結石再発予防です。「その方に結石ができた原因を深く理解しないと、再発を防ぐのは困難です」と飯田先生は言います。さらに、「結石ができる人は生活習慣病になりやすいという報告もあります。逆に言えば、結石ができにくい食生活、ライフスタイルに変えることで、将来かかり得る内科疾患を予防できる可能性があるわけです」と、結石治療を機に先手を打って生活習慣を見直すことを勧めています。「一人一人の患者さんとじっくり向き合い、そこに時間をかけたいというのが開業の理由の1つです。幸い当クリニックには、腎臓・循環器内科の専門医である弟もいますので、常に連携し、外科と内科の両面から健康管理に目を配ることができます」。

環境に優しい医療で、電力消費量を約56%削減

「90歳代の方でも、経尿道的レーザー前立腺切除術によって尿閉塞が改善し、カテーテルが取れると途端に元気になられたりします」と話す飯田先生は、高齢者に対しても積極的かつ優しい医療を提供するため、出血や体への負担が少ないグリーンライトレーザーなど、最新の手術機器を導入しています。また、環境変化で認知症が発症・悪化しないよう、手術は1~3泊の短期入院で行い、4つの病室は全て落ち着きある個室としました。

また、同クリニックは2014年の新築移転にあたり、透析で大量に使う水の再利用、太陽光発電・太陽熱温水システムの導入など、環境対策を徹底しました。新築後の電力消費量は、標準的な同規模の病院に比べ約56%削減されたそうです。「かつて炭鉱で栄え、今は高齢化の先進地域となった大牟田で、人と環境に優しい医療の新しい在り方を提案し、展開していきたいです」と飯田先生は張りのある声で語ります。



透析室は、通常32床が入るスペースに24床を配置しているため（6×4のユニット式）、ゆったりとした雰囲気の中で時間を過ごせます。また、空調の風が直接当たることのないよう、放射空調（ふく射空調）を採用しています。